

第54回全国公立学校難聴・言語障害教育研究協議会 全国大会

第3分科会「吃音のある子供への指導および支援」

提案1 「吃音がある子供の非認知能力が育つことばの教室を目指して」
竹尾絵里先生

講評の担当：筑波大学人間系 宮本昌子

smymt@human.tsukuba.ac.jp

令和7年7月30日（水）11時15分～30分

国立オリンピック記念青少年総合センター

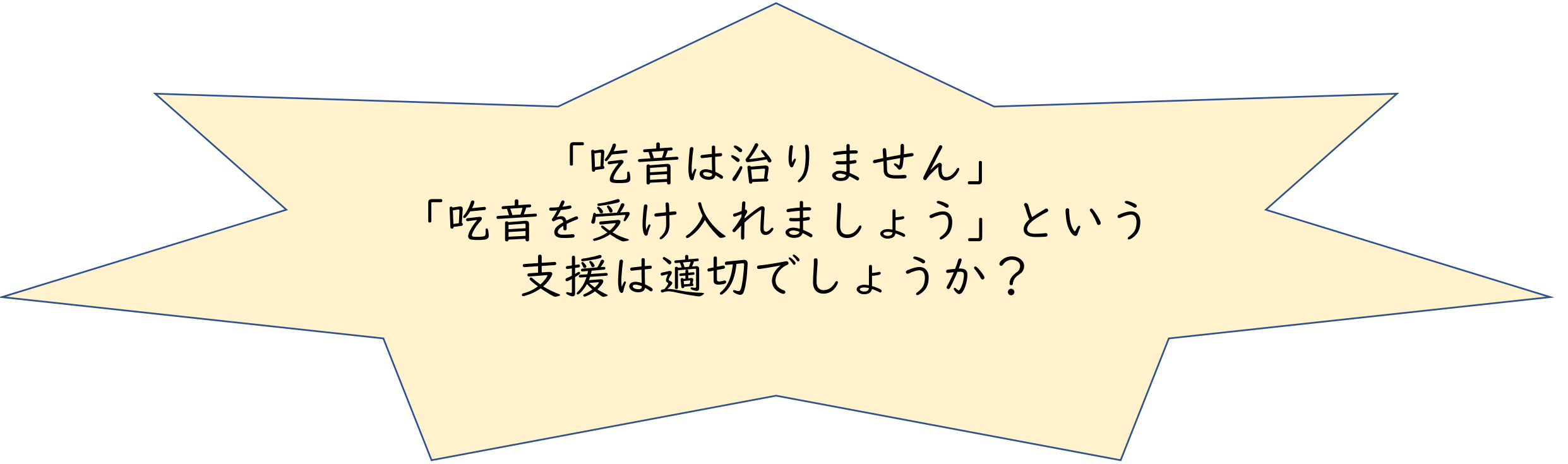
日頃の児童との対話の中で育まれていくことばの力についてお話しいただいた竹尾先生からのご提案について

- 事前に考えたこと
- 今日の発表をお聴きして考えたこと

について、講評として約15分間でお伝えしたいと思います。

学齡期は支援者にとって難しい時期

- 自然治癒の期間が過ぎた状態
- リックカムプログラムやDCモデルの適用年齢を過ぎた年齢



「吃音は治りません」
「吃音を受け入れましょう」という
支援は適切でしょうか？

では、学齢期には何をすべきか？

Scott Yaruss先生（アメリカの吃音研究者）の説明によると、

- 子どもたちが言いたいことを**自信を持って言えるように**すること
- 他の人と交流する能力を制限する回避行動やその他の恐怖に基づく行動を最小限に抑えるようサポートすること
- より簡単に、より少ない身体的努力で話せるようになるよう導く

これらは吃音のある子どもの生活に実質的でポジティブな影響を与えることができる、やりがいのある指導である

吃音の支援の難しさ

●吃音を治したい、改善させたいと思っているが、なかなか軽くない場合がある。

→小学校に入ってから、吃音がよくなる場合もあるし、悪化する場合もある

●「吃音を受け入れましょう」という指導が、吃音のある子供の全員に適しているわけではない

→吃音が出ない方がいいと思っている場合もあるし、工夫などをしながら自分で対処している場合もある



吃音の支援というのは、個人の
考えや価値観が、大きく影響す
る分野ではないか・・・？

対話を深める指導の利点の例

- 子供が何を考えているか、話を十分に聴くことができる

→ 色々な考え方があある中で、**教員がその子供が考えていることを把握し、理解できる**

- 教員との対話によって、自分について言語化することで、自分への理解が深まる

→ 今までモヤモヤとしていた感情がまとまったり、**子供が自分自身であってても気づいていなかった側面に目を向け、認識を新たにす**る

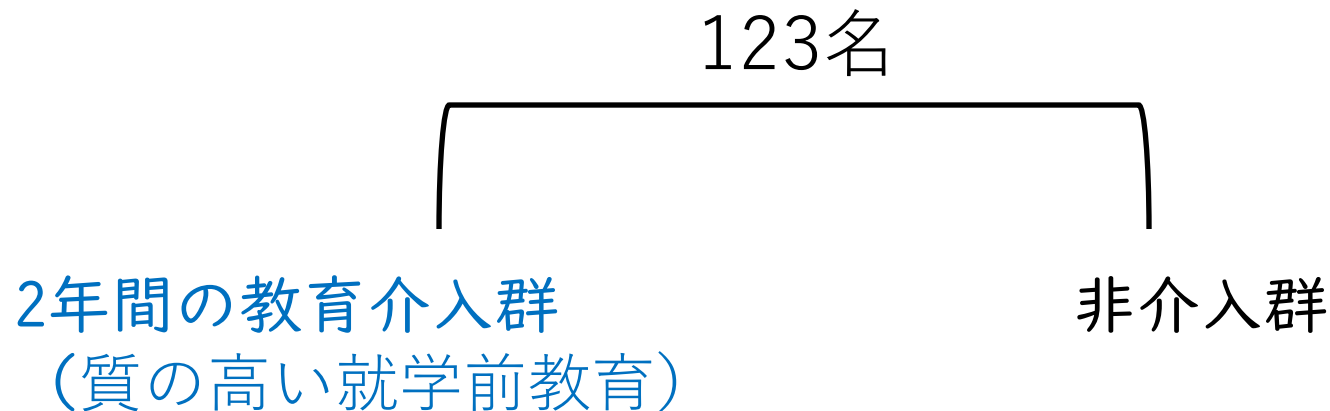
「非認知能力（non-cognitive skills）」
を育てるということ

「非認知能力」提唱の背景にある研究

James J. Heckman（ジェームズ・ヘックマン）の研究

米国で実施された主要な早期児童支援プログラムである「ペリー・プリスクール・プログラム」の成功要因を分析

3～4歳の低所得層で知能指数（IQ）の低いアフリカ系アメリカ人の幼児が対象



「認知能力」と「非認知能力」

- 就学初期においてIQの一時的な向上がみられた（ただし、その効果は男子において小学校中学年には消失）。
- しかし、**非認知能力**（self-control, persistence, motivationなど）の発達が長期的に大きな影響を及ぼしたとされる。

「認知能力（cognitive skills）」

「非認知能力（non-cognitive skills）」

非認知能力に含まれる主な具体的なスキル

能力の分類	具体例	日本語での説明
自己制御力 (self-control)	我慢する力、感情のコントロール	衝動を抑え、目標に向かって行動できる力
意欲・やる気 (motivation)	挑戦しようとする態度、好奇心	新しいことに取り組もうとする気持ち
忍耐力・持続力 (grit, persistence)	あきらめず続ける力	難しい課題にも粘り強く取り組む態度
自己効力感 (self-efficacy)	自分ならできると思う気持ち	自分の能力に対する自信と期待
社会的スキル (social skills)	協力する力、共感、対人関係能力	他者と良好な関係を築くための力
責任感・誠実さ (conscientiousness)	きちんと物事をやり遂げる	規律を守る、責任をもって行動する力

氷山の水面より上
は吃音の言語症状

行動
Behavior

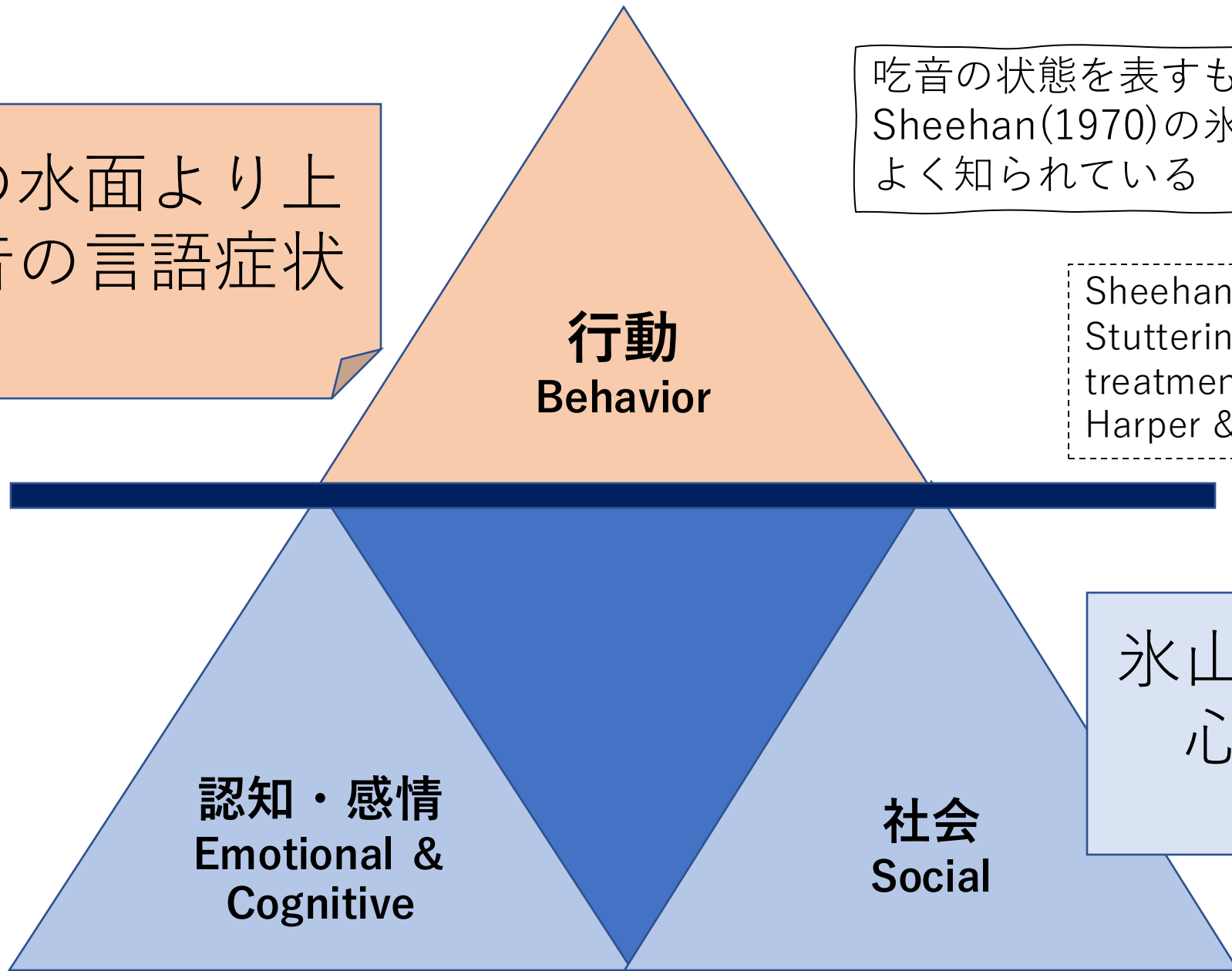
吃音の状態を表すものとして、
Sheehan(1970)の冰山モデルが
よく知られている

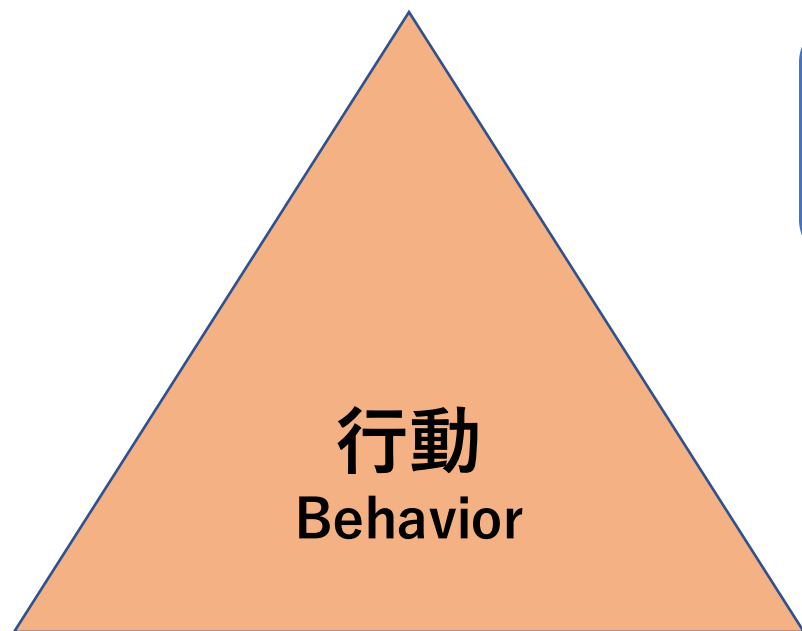
Sheehan, J. G.(1970)
Stuttering: Research and
treatment. New York, NY:
Harper & Row.

認知・感情
**Emotional &
Cognitive**

社会
Social

氷山の水面下は
心理的・社会的症状





吃音が生じることである

…緊張して言葉がうまく出せず、「ありがとう」の
「あ」も言えない。

きつねびよりP11

多くの人は、吃音のある人の困り感は、
「行動」面にあると見ている

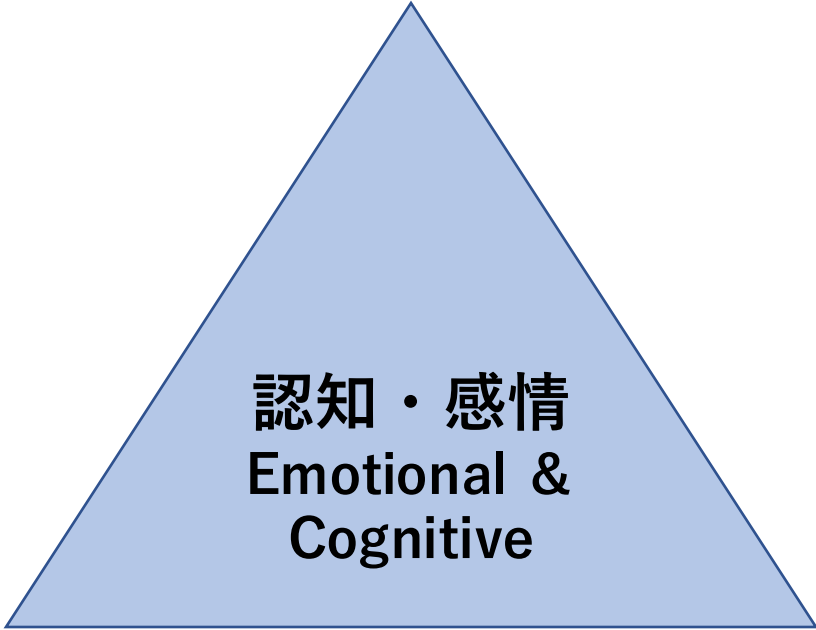
特にア行が言えない。「ありがとうございます」
「お願いします」など感謝や礼儀としての言葉が言
えないのはとてももどかしいことです。

きつねびよりP23

吃音キャンプ後の日直では、アドバイス通りに号令
をかけてみようと思いましたが、今度は「れれれ
れれれれい」と連発の吃音が出ました。

きつねびよりP17

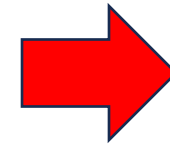
「きつねびより」（2020, きつねっとファクトリー



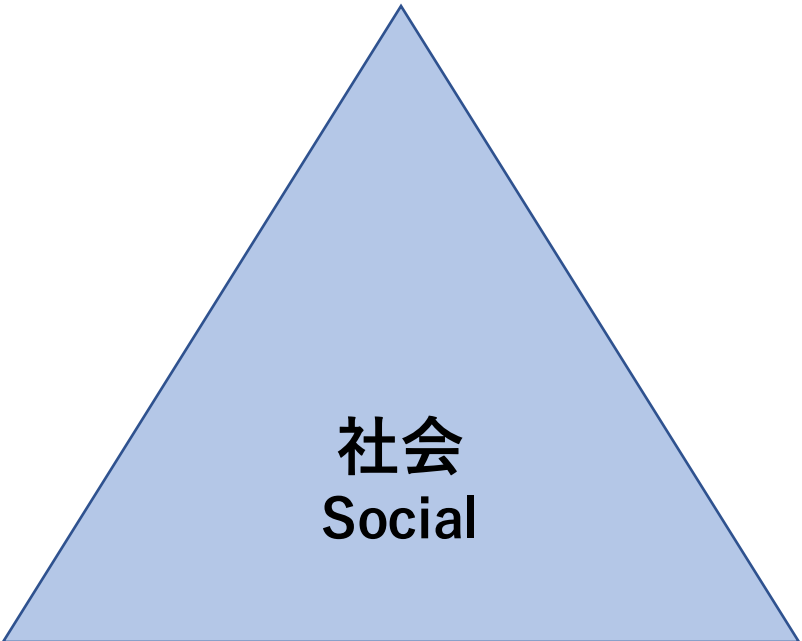
認知・感情
Emotional &
Cognitive

しかし、彼らに必要な支援は、海面
の下の部分（「認知・感情面」）に
あるのです

- 自分が吃った時にあなたは感じるの？
どのように受けとめて対応したらいいの？
ということをいっしょに考える必要があります。



「対話」を通した
指導が有効であると思われる



社会
Social

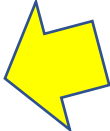
もう一つ、保護者や子どもが吃音のことで悩むのは、社会が吃音を理解していないということに原因があるのです
(Boyle, 2019)。

社会における無理解による、

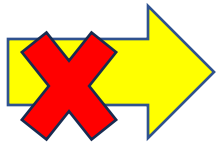
否定的な観方

偏見

『MORE THAN FLUENCY』 P34-P36



「吃音」のことがよくわからないがために、
推測で、根拠のないことを信じてしまう。
(例：気持ちが弱いから吃音になるの?)



吃音のある人とよく接したことがある人、吃音について正確な知識を得たことがある人は、吃音のある人を否定的に観たり偏見を持たないことがわかっています。

ご清聴をありがとうございました。

主な参考文献：

Amster, B. J., & Klein, E. R. (2018). *More than fluency: The social, emotional, and cognitive dimensions of stuttering* (Vol. 1). Plural Publishing.

Yaruss, J. S., Coleman, C. E., & Quesal, R. W. (2012). Stuttering in school-age children: A comprehensive approach to treatment. *Language, Speech, and Hearing Services in Schools*, 43(4), 536-548

きつねっとファクトリー（2020）きつねびより 吃音のある97人の体験談集